

くすのきだより



令和5年3月吉日
来迎寺小学校
臨時号

【令和4年度学校評価アンケート集計と分析】

スマートフォン等による学校評価アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

年度当初にお知らせした教育目標や「グランドデザイン」の達成状況について、児童・保護者・教員それぞれが「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」のどれに当てはまるかで評価していただいたもの※1を確認して、次年度以降の教育活動にフィードバックさせていきます。

※1 児童、保護者、教員の評価対象

児童	保護者	教員
個々の質問内容について、 <u>自分の姿勢や取り組みの成果</u> について評価します。	個々の質問内容について、 <u>お子さんの取り組みや成果を通して学校の教育活動の成果</u> について評価します。	個々の質問内容について、 <u>教員としての自分の姿勢や指導・支援の成果・状況</u> について評価します。

分析するに当たり、各質問項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を肯定的評価としました。肯定的評価の割合については下の分析における個々の質問項目の行を参照してください。なお、()内は令和3年度との比較です。(一)は前年度に該当質問項目がないため、比較不可であることを表しています。

児童・保護者・教員の三者とも肯定的評価が90%を超えた場合は項目名の先頭に◎、そうでない場合は、程度によって○、▲を付けました。

◎「学校生活」【肯定的評価—児童：94%(-1%) 保護者：97%(+8%) 教員：100%(+6%)】

三者とも肯定的評価が90%以上、教員に至っては100%と高い評価となりました。本校では、「この仲間だから分かった・成長できた」と感じられる学習・生活の場を実現することを通して自己肯定感や自己有用感の獲得を支援しています。教員の肯定的評価が100%であることから、「子どもたちが適切に自己肯定感や自己有用感を獲得することができるように、自分は本校の教育目標に照らし合わせて適切に工夫したり、配慮を怠ることなく行ったりした」とすべての教員が考えているということです。児童や保護者の肯定的評価が教員と同じく100%になるよう、今後も、児童一人一人を大切にしたい学級・学年経営をし、仲間（絆）づくりを応援していきます。

○「授業」【肯定的評価—児童：87%(-3%) 保護者：91%(+0%) 教員：100%(+3%)】

保護者と教員の肯定的評価は90%以上、教員に至っては100%と高い評価となりました。本校では、「分かるうれしさ」と「学ぶ楽しさ」の味わえる授業を目指して取り組んでいます。また、教員の自己評価が100%であることから、「分かるうれしさ」や「学ぶ楽しさ」が味わえるような授業を目指して十分な教材研究や適切な個別支援を行ってきた」とすべての教員が考えているということです。

残念ながら、児童の肯定的評価は昨年度比で3%下がり、87%でした。言い換えれば、肯定的評価をしなかった児童が13%（学級に4人程度）にも上ったことや、教員の肯定的評価との隔たりが問題でもあります。中学年の肯定的評価が89%、高学年の肯定的評価が85%と、発達段階が上がるに従い、学習内容が難しくなり、分からないことが増えたり、授業での活躍の機会が減ったりする児童が増えているように考えられます。また、コロナ禍で長時間の対面でのグループ学習が時として制限されることもあったことも一因かもしれません。

今後、学びのユニバーサルデザイン化を通して、「分かるうれしさ」を実感できる授業づくりや、児童が学習内容に対して切実感を強くもち、意欲的に追究を進めたいくなる課題解決的な学習を通して「学ぶ楽しさ」を実感しやすくなる授業づくりをいっそう進めていきます。

▲「家庭学習」【肯定的評価－児童：85%(-1%) 保護者：86%(+0%) 教員：78%(-10%)】

児童の帰宅後の生活環境だけでなく、発達段階や習熟度は学年や個々によって異なるため、個にあわせた難易度や量の課題を用意することが理想的です。そうになっていないことが、児童、保護者、教員の三者において肯定的評価が90%に届かなかったことにあらわれているように思われます。

昨年度の学校評価分析において、令和4年度には継続的なタブレット持ち帰りによる家庭学習の個別化が期待できる旨の内容を記述しました。しかし、タブレット内の教材の充実度が不足気味であることや、学校として有効活用するための組織的な取り組みを十分に行いきれなかったことが、特に教員の肯定的評価の昨年度比-10%にあらわれているように思われます。今後も家庭学習の在り方について保護者と情報を共有しながら、学校全体で取り組んでいきたいと思えます。

○「あいさつ」【肯定的評価－児童：84%(+2%) 保護者：91%(-1%) 教員：100%(+6%)】

保護者と教員が両者とも肯定的評価が90%を超えたのに対し、児童は84%とさらなる向上の余地を残した結果となりました。ただ、児童の肯定的評価は昨年度より2%上がっていることは注目し値すると思えます。学年別にみると、3年生が81%、4・5年生が83%、6年生が89%と発達段階に応じて肯定的評価が高まっています。登校時、とりわけ6年生の多くは相手の顔を見ながらしっかりと聞こえる声であいさつすることができます。これは、日頃からの自己肯定感や自己有用感の獲得に基づいており、質問項目1「学校生活」における95%という高い肯定的評価とも大きな関連があるように考えられます。

立番や地域の方から「子どもたちのあいさつに元気をいただいている」「もう少ししっかりあいさつができるとうい」等、あいさつに関する多様な評価をいただいています。あいさつは、よりよき人間関係づくりの基本です。あいさつの大切さを子どもたちが実感できる手立てをさらに見直し、改善していきたいと思えます。ぜひ、家庭や地域でも個々の児童の顔を見てあいさつを交わしていただき、あいさつが溢れる来迎寺小学区になるようにご協力いただけると幸いです。

◎「命・人権」【肯定的評価－児童：97%(+3%) 保護者：98%(+9%) 教員：100%(+3%)】

三者とも90%を超える高評価でした。特別の教科道徳や学級活動を中核にしたすべての教育活動において、「命・人権」についての児童の関心や知見を高めるように配慮しています。「いじめ」は「存在しない」ことが最良ですが、成長の途中である児童が共同生活を行う学校においては、「いじめ」は起こらないとは言い切れません。とりわけ、現在のいじめの定義に基づく、明確な悪意が認められない言動でも、受け手が苦痛を感じた場合はいじめとして扱われるため、特に低学年においてはいじめ認知件数は少なくありません。大切なことは表面的には些細な問題（いじめ）であってもそれを見逃すことなく、「どんな言動が相手を傷つけたか？」「どのような言動が望ましかったか？」をいっしょに考える機会をもつことだと考えます。つまり、「いじめ」発生というピンチを子どもたちの自他の「命・人権」についての思考や認識を深めていけるチャンスに変えていくことです。それができれば、「いじめ」に起因するであろう長期の「不登校」や命にかかわる事故は未然防止できるはずです。

本校の「いじめ防止対策基本方針」、「いじめ対策ナビ」はホームページでも紹介しています。引き続き、本校のいじめ対策にご理解、ご協力をお願いし、保護者の皆様への周知を図っていきたくと思えます。

▲「体力づくり」【肯定的評価－児童：77%(-9%) 保護者：91%(+0%) 教員：94%(+6%)】

児童の肯定的評価が昨年度比-9%で77%となりました。これには、新型コロナウイルスの感染予防や熱中症対策で運動の制限が継続していることが主な理由だと考えています。他にも、休み時間は心身をリラックスさせて次の授業のためのエネルギーを蓄えられるよう、教室や図書室で過ごすことも認めています。低学年児童の方が外で元気に遊ぶ児童の割合が高いのか、89%→82%→71%→66%と学年が上がるにつれて「体力づくり」に関する肯定的評価が下がってきています。

教師の肯定的評価が昨年比+6%で94%となっているのは、①感染予防を図りながら、3年ぶりに学校全体の運動会やマラソン大会、6年生のバスケットボール指導会が開催できたことや、②令和元年度（コロナ以前）と令和3年度（コロナ禍）の体力テスト結果に明らかな差異がみられないこ

とに起因しているように考えました。

ただ、全国的な傾向として児童生徒の体力低下が時として話題になります。これらの問題の改善を図りながら、運動や体力づくりの大切さや外遊びの楽しさを実感できるような環境整備や学校体制に努めていきます。

◎「絆づくり」【肯定的評価—児童：95%(-1%) 保護者：94%(+1%) 教員：97%(+0%)】

昨年度とほぼ同等で、三者とも肯定的評価が90%を優に超えました。87%→94%→98%→98%と学年が上がるにつれ、肯定的評価が上がってきています。思考力や判断力、コミュニケーション能力や経験が高まることで絆の質が向上したり、絆づくりの大切さを認識したりしやすいことが理由の一つかもしれません。絆づくりは、「学校生活」(項目1)や「学習」(質問項目2)とも大きくかかわりがあり、自己肯定感や自己有用感を獲得する上での中核をなす要素です。授業や生活の中で互いを認め合う場を設定し、今後もいっそう絆づくりを大切にしたい学校・学年・学級経営をしていきます。

◎「防犯・防災」【肯定的評価—児童：97%(+0%) 保護者：96%(+1%) 教員：94%(-3%)】

本校では、児童が問題解決に向けて主体的に考えたり論議したりする防災教室と、そこから生まれた知見を確認する場となる避難訓練をワンセットとする「行動する防災教育」を計画的に実践しています。避難訓練の具体例は、通行不可能箇所や負傷者、行方不明者を設定したり、引率する教師がいない時間帯を選んだりするといったリアリティのある状況を設定したものです。

また、不審者侵入を想定した防犯教室と避難訓練もワンセットで3月上旬に予定しています。

防災・防犯のための環境整備はもとより、「自分の命は自分で守る」意識を高めていくことで、万一の場合においても、甚大な被害を出さないように備えていきます。

◎「新型コロナウイルス対応」【肯定的評価—児童：91%(-1%) 保護者：95%(-4%) 教員：97%(+3%)】

96%→89%→90%→88%と学年が上がるにつれ、肯定的評価が下がってきています。ただ、日々の教室環境等を見る限り、数字に表れているような差異は感じませんので、高学年になるほど自己評価の基準が高い可能性があります。

感染予防については、国、県、市からの指示に従い、学校生活でのあらゆる場面で児童、教員に周知徹底しています。11月に愛知県立大学教授清水先生の研修を受け、各教室内にサーキュレーターを置いて換気の効率化に努めています。児童の帰宅後、休日の感染予防にも十分ご留意ください。

◎「保護者・地域との連携」【肯定的評価—児童：97%(-) 保護者：92%(+4%) 教員：91%(-9%)】

保護者の評価が4%高まったのは、全校そろっての運動会開催や3年ぶりに開催した交通安全パレード等で活躍する児童の様子を保護者や地域に発信できたからだと思います。今年度から「地域とともにある学校」づくりをいっそう目指し、昨年度まで3月下旬に開催していた「学区教育懇談会」を年3回開催しています。地域と学校の情報共有と連携・協働を図りながら、来年以降の本格的なコミュニティスクール制度の開始に備えています。

教員の肯定的評価が昨年度比-9%の91%になった理由として、学校と地域との人的交流について、コロナ禍で制限があったことや、働き方改革で機会減少となったことが考えられます。

▲「なやみ相談」【肯定的評価—児童：76%(-) 保護者：87%(-) 教員：97%(-)】

児童が答えたアンケートをもとに教育相談を年2回設け、主に担任が一人一人の児童と面談をしています。面談後にも必要に応じてこまめな声掛けをしながら児童を支援しています。

児童の自己評価は76%と、数字的にはとても低いように感じられますが、「不安や悩みを気軽に先生に相談できましたか?」という質問内容なので、相談するか否か?気軽に相談できるか否かは、不安や悩みの質によります。したがって肯定的評価が低いことは驚くことではないと考えています。6年生では他学年と比較すると、肯定的評価が10%ほど大きくなっています。最高学年として心身共にたくましくなり、教員(大人)との心的な距離が近くなっていることが気軽に相談できる児童の割合が高いことに結びついていることが考えられます。

教師としては児童からの相談には適切に対応したという思いが97%という数字にあらわれています。本校では、児童からの相談の有無を問わず、個々の児童を取り巻く様々な問題（不登校、発達障がい、いじめ等）について解決が担任や学年だけでは難しいと判断した場合は、ケース会議を設定し、必要に応じて臨床心理士や外部機関にも加わっていただき、全校体制で問題の改善を図るようにはしています。

◎ 「情報発信」【肯定的評価－保護者：94% (+0%)】

今年度も学校だよりと学年だよりを合併した形で発行することで効率化を図っています。ホームページも、「校長日記」を原則、毎日更新したり、お知らせ、おたより、Q&A等、内容を充実させたりしています。今後も、必要なところは改善しながら、適切に情報発信を行っていきます。